

資源管理型漁業推進総合対策事業調査

4. 沿岸特定資源：イカナゴ

(抄 録)

伊 藤 欣 吾

目 的

佐井村と脇野沢村の沿岸を対象に、イカナゴ資源の維持と適正な利用を図るため、資源状態や生態を把握し資源管理型漁業への転換を促進する。

内 容

イカナゴ稚仔分布調査

津軽海峡西部～むつ湾湾口域において、新型稚魚ネットを用いて水平曳と鉛直曳を行いイカナゴ稚魚を採集した。1984年以降の稚仔分布調査結果から、イカナゴ稚仔の発生量と加入資源は相関関係にあると考えられ、漁期前に稚仔の発生量を調べることで漁況予測は可能と思われた。各種ネット調査の結果から、稚仔の発生量を調べる方法としては、従来の新型稚魚ネットの水平曳が適していると考えられた。1997年の3月の稚仔採集尾数は過去最高、4月は前年に次いで2番目に多く、漁獲量は4千トンを超え近年では最高となった。

イカナゴ漁獲量調査

青森県全体のイカナゴ漁獲量は1995年に約4,000トン（生換算）と18年振りの豊漁になり、翌年も同程度の豊漁となった。脇野沢村漁協のイカナゴ漁獲量は1996年と1997年に各々約200kg（生換算）と非常に少ないものであった。佐井村漁協の漁獲量は1995年以降ゆるやかに増加し、1997年は1,161トン（生換算）前年比110%であったが、漁獲金額は年々減少し1997年は8,500万円前年比78%であった。今別町東部漁協の漁獲量は1995年以降ゆるやかに増加し、1997年は986トン（生換算）前年比110%であったが、漁獲金額は横這いで1997年は1億円前年比94%であった。平館村漁協の漁獲量は1995年と1996年は約350トン（生重量）で1997年は大きく増加し896トン（生重量）前年比330%であり、漁獲金額は年々増加し1997年は1億900万円前年比150%であった。主要3漁協におけるイカナゴの単価の年変動は減少傾向にあった。また、漁獲尾数の推定方法を確立した。

海 洋 環 境

1997年の1～5月の佐井村地先海面水温は1月中旬に3日間だけ前年値と平年値を下回ったが、その他の期間は前年値、平年値より上回った。特に、1月下旬～2月中旬は平年値より1℃以上高めが

続いた。イカナゴ稚仔の主餌料であるカイアシ類はむつ湾湾口域に広く分布し、分布密度はおよそ29個体/m³であった。むつ湾湾口域のカイアシ類の分布密度は青森県の他の海域に比べると少ないと思われた。ヤムシ類の分布はむつ湾湾口域では少なく、湾内では極端に多かった。

標本船調査

佐井村、脇野沢村、今別町東部及び平館村において20隻のイカナゴ漁の標本船調査を行った。むつ湾湾口域におけるイカナゴ漁場が津軽半島側で始まり徐々に下北半島側に移ることが把握された。漁獲されたイカナゴの推定全長組成から発生時期の異なる2～3つの群が漁獲対象となっていることが判明し、今別町東部と平館村漁協は早期発生群を主体に漁獲していたのに対し、佐井村漁協では後期発生群を主体に漁獲していたと考えられた。また、標本船データからDe Lury法を用いてイカナゴの資源尾数の推定を試みたが、De Lury法による推定は困難であると判断された。

イカナゴ生態調査

津軽海峡西部～むつ湾湾口域において空釣り漁具を用いてイカナゴを採集した。生殖腺熟度指数の推移から、イカナゴ雄は12月中旬頃から、雌は1月中旬頃から成熟すると考えられ、産卵盛期は1月下旬～2月上旬と思われた。また、生物学的最小サイズは雄では体長120mm、雌では130mmと考えられた。胃内容物指数から、イカナゴは6～12月は摂餌していないと考えられ、夏眠しているとおもわれた。イカナゴの夏眠場所は佐井村長後沖水深50m付近で、そのピークは9～10月であると考えられた。